深イ～話！ No.18

私は物心ついた時から、誰からも関心を持たれていないように感じていました。両親は仲が悪く、二人とも自分のことで精一杯で、私は少しずつ心を閉ざしていったのです。

そんな私が、中学校に入ってある人と出会いました。担任の渡部（わたべ）先生です。５０代半ばで、第一印象はどこか頼りなさそうな人でした。

私が通っていた中学校には、週に一度“お弁当デー”という日がありました。名前の通りその日はお弁当を持参しなければいけません。
私はこの日が大嫌いでした。他の子はお母さんが作った色とりどりのお弁当を持ってくるのに、私にはお弁当を作ってくれる人がいません。

いつもパンを買い、一人で屋上に行って流し込むように食べていました。お腹は一杯になっても心は満たされませんでした。

ある日、いつものように私が屋上でパンをかじっていると、渡部先生がふらりとやってきました。

「お、うまそうなパンだな。先生の弁当と取りかえてくれや。」
先生は私のパンを取り上げ、代わりに弁当箱を私の膝の上におきました。先生から渡された弁当はとてもおいしく、涙が出そうになりました。こんなにおいしいお弁当を一度でいいから作ってもらいたいと心底思いました。

その日から、“お弁当デー”のたびに先生は私のいる屋上にやってきて、パンと弁当を取りかえてくれました。誰にも心を開かなかった私が少しずつ先生にだけは心を開き始めました。

「先生の奥さんって、料理上手なんだね。」
あるとき、私がそう言うと、先生は**「これは俺が作ったんだ」**と答えました。先生は奥さんを病気で亡くしてから男手一つで子育てをしており、子どものためにお弁当を作るようになったということでした。
「こんなにおいしいご飯を作れるなんてすごいね」と私が感心すると、先生は**「簡単だから教えてやるよ」**と言いました。

そうして、休日に少しずつ料理を教えてもらうようになり、一年も経つと、自分でお弁当を作れるようになりました。
（ちゃんとしたモン食ってりゃ心が満たされる）というのが先生の持論です。

渡部先生に出会わなければ、ずっと屋上でパンをかじりながら独りぼっちで中学を卒業していたでしょう。道を踏み外していたかもしれません。

あれから、１０年以上の月日が経ちましたが、毎日お弁当を作るたびに、先生を思い出します。**「玉子焼き、上手になったじゃないか、えらいぞ」**と笑ってくれた先生との出会いが、今の自分を作ってくれたのだと感謝しております。

～ＰＨＰ「生きる」より～